

189

24

014601-000-4

189-24

宝訓文彙

角田 忠行/編

M6

ABB-1023



宝訓文をかきあつめし故よし



こが皇典を悉ふ神皇の萬姓を治めまほし御を

し書ふしあれども人々む者い其をうぐ

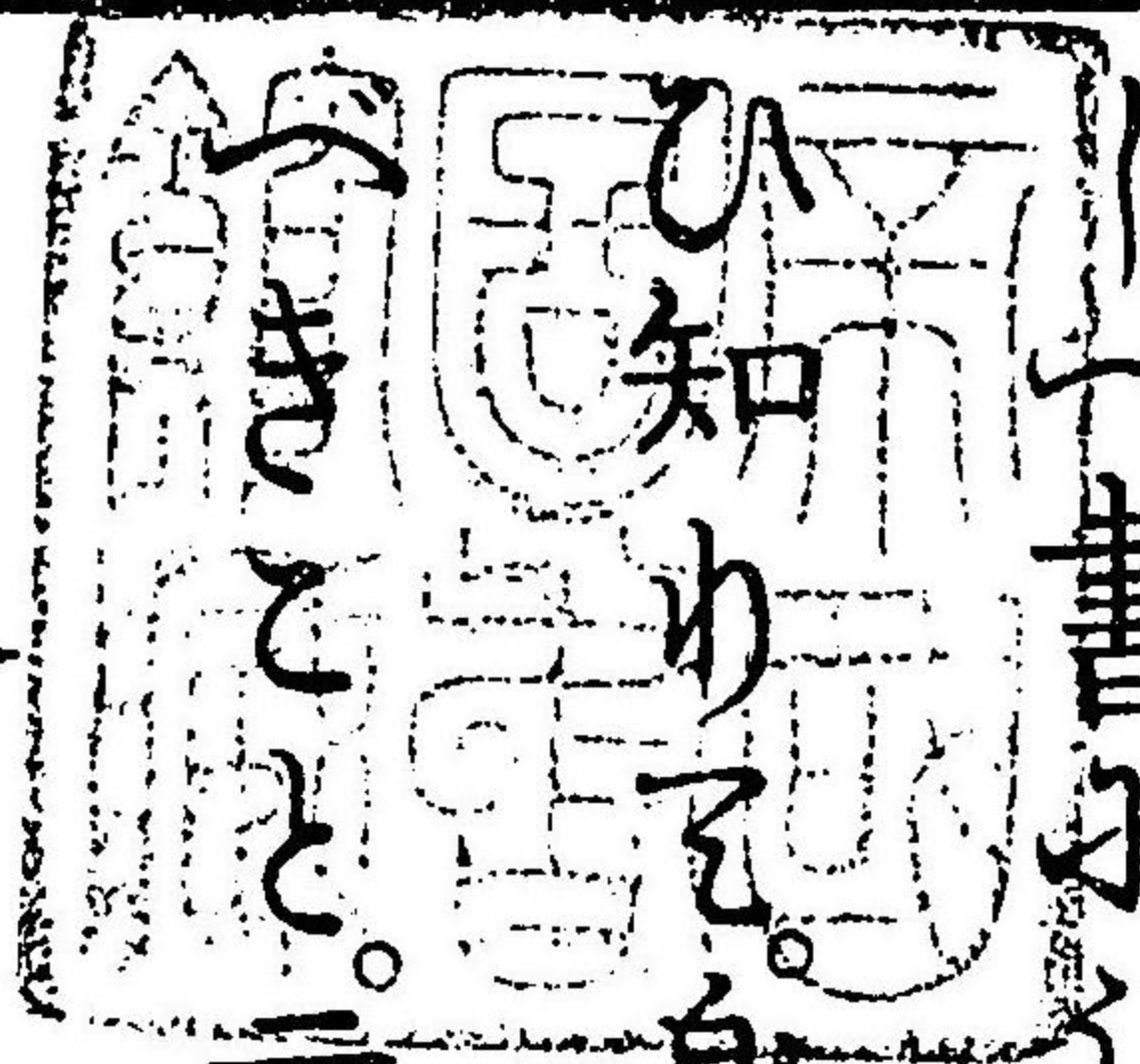
ひ知りて身のかどくふ勤め守り順ひ奉る

べきこと云も更あり然いあれども今の世ふし

てい本書を悉ふうぐひ知ることとはあるや

まうらぬ業ふしあれは其が中より吾をみ士

庶人のそれすくふ子弟を教ふる手便よかれ



る條々をら。本書の中とり書拔あつめてお
る。日本宝訓枕草紙。その餘は書よりめ拔萃
して。かく一卷をいあせるれ。か本善言美詞
を見出るま。小書添ふべくあ。忠行志るに。

元治元年甲子十一月六日

寶訓文彙

角田忠行敬緝

皇産靈大御神諸の詔命以て伊邪那岐命伊邪那

美命二柱大御神此とよへる国大地を於

く物たおれより成せと事任し給ふ。これ御教言の起

る。万物たおれより成せと事任し給ふ。これ御教言の起

天神皇産太占小ト合大祖天御中主尊の大御

二柱神子教子給えく。女の言先どつえ良いど。

男は左子小立ち。女を右子次小従子よ。高皇

尊を男神小て先子生まじ。神皇産靈尊を女神
にて後子生ませる謂小よりて。都て男を上小

先小女を下より次子立ちて左を上とし右を下
とよみ流も天御中主大御神の立とよむる道
を二柱神初て御合ませる時よりよを阿や
まゆ給する故より更小教を給へるなり

伊邪那岐命詔く天照大御神を高天原を治むる

し須佐乃男命亦御名也滄海原潮の八百重を

知らむべし天照大御神の地球とる高天原

めし給するとありはし須佐乃男命の地球

此八百重は地球万国の古称あり故よの大御

伊邪那美命詔く火神の荒びせむ水神瓠埴山姫

川菜を以て鎮め奉れと事教を悟し給ふ此を

を禦ぐ術を教ふおきて給へるあり

天照日大御神宇氣母智神此御躰より生れ詔くお

此物等もうつしき青人草の食て活べき物ぞ

を宣ひて乃ち粟稗麥豆を陸田つもれ稻は水

田つ物とありよと因も天邑君を定め即ち其

稻を以て天の狭田長田より殖て其を火食を流

事は得しめよと天香山小桑を殖る養蠶し口

裏小蚕を含み絲は抽きはしおと衣縫ふ業を

得しめ給ふ

又大地を詔く豊葦原中囿を我が御子のたぎく

無窮よ王を坐むべき囿ぞ

又天命天、太玉、詔く。諸部の神等を率キ多。其職天皇の朝延小仕奉る。小仕奉ること。天上の儀天照大御神の朝延此儀式をいふ此如くせよ。

又詔く。天下四方の人民を。こか吾が御寶あり。須我大神詔曰。から罔小。天皇命此用を給ふ。漆きも此阿豆。其板貢が志むる便小とて。杉を楠とを生ナして。船を作らしめ給む。其時をもに生し給する檜を。宮殿の杖小用ひ。被る棺此杖とかまを。及しと教を給ふ。かお嗽スべき八十木種。及び萬木を。め生オウし給ふ。

大名持命。少名持命。教曰。父母は尊祀物ぞ。妻子は愛カしむべきものぞと詔ミひて。いたも依五倫の道多教へ給ふ。

須勢理毘賣命の神語。りが大神主神へ。男小いませむ。うち見る嶋のさたぐ。かき見る磯の前くおちば。若草の妻り。せら免。我の女小しあまば。君をおきて。男をかし。夫へ祈し。

神武天皇詔曰。戦ひ小勝て驕らぬ。良ヨき將此行ひぞ。

又詔曰。大人キの制リを立るは。義ヨクのからば時小従ふ。

苟カク小も民タリ利リキあらば。何ぞ聖造アノツカミナリキ小妨コト何らむ。且イ當ト山林をひらき。宮室オホミヤを經營ツツクて。元オホミヤカラに鎮ツむべし。上アノツカミに乾靈アノツカミの囿コトを授け給ひし徳ツクシ小答へ奉り。下シに皇孫ミコれ正を養ツクむ給ふ御心ミコを弘め。然て後六合アノツカミを兼ツク多都を開ツクた。八紘ヤマトを掩オホクて宇ミと爲セむ。亦可ヨうらむや。

又詔曰。我皇祖天、御中主、尊より、御代、の御祖をいふ。の御靈。天より降ミツ鑿ナして。朕ワが躬ミを助け給タり。今諸アタれ虜アタども已マに平ナぎて。海内クヌチ事チかじ。天神アノツカミ即即皇皇を祭マツて大オホキミ孝オホツクげせむとて。祭マツの場ニハを鳥見トリミの山中小立ヤマノコタテて。皇

祖天神を祭り給ふ。

倭姫命詔曰。きとあき心かくして。丹ニき心を以て。清スく潔スく齋イハひ慎シみ。左の物を右小移ウチマシさば。右の物モノを左小移ヒダシさば。左を左ヒダシし。右を右ウチマシとし。左小歸ヒダシて右小廻ウチマシる事コトも。よろづ違ヒダシふ事コトかくして。元オホキミをはぐめとまると。本モトもとくまると。故ユヘぞ。

又詔曰。神魂カミミムスビノミコト尊ミの精靈ミタマ。父母オヤれ氣キ小入コトて。生アレ産イる神カミを。人神ヒトカミと申イハは。吾黨オホキミの體ミ中小坐コトに神カミあり。

又詔曰。咎トガある者モノは。黄泉ヨミ國クニに往イく。咎トガあきものモノは。常世トコヨ國クニ小歸コトる。

神功皇后詔御軍令曰。金鼓こきどめかく。旌旗たがま
がひみどるれば。軍人とのをじ。○財をむさ
ぶり欲ホリお申く。私をいどた内小顧みせむ。敵の
せりことありてむ。○敵少くともあどる事
。弱く。強くとめ恐る。事ありれ。○あどふ者
を。か聽しそ。自ら服フクひぬる者へ。か殺しそ。○戦
ひ勝つ人小い。必タキモび賞あるぞく。小げ走る者を。
必タキモび罰あらむものぞ。
八幡大神詔曰。我因ハ天地れ分れしよ。已ハ以來。君
と臣と定マとき。天ツ日嗣ハ皇統マ立てよ。臣を以

て君とまゐる事ハ。ふつ小非ヒ。無道ハ人々早く
除クくばし。

繼體天皇詔曰。良將の軍は。恩を施し惠を推し。己
を恕し人々治む。攻るハ河れ決るガ如く。戦ハ
風の發るガ如し。

宣化天皇詔曰。食ハ天下の本あり。黄金萬卷も飢
を療まべりらば。白玉千箱も何ぞよく冷マま
くはむ。

孝徳天皇詔曰。凡そ政を致さむと欲するも此ハ。
君も臣め。まづ己を正しくして。ちて後ハ人々

正せ。若自ら正さば。何ぞよく人を正さむ。慎
まざるべしむや。

又詔曰。神あがら。亦自ら神の道あるを云ふ。吾

御子治まべし。事任し賜ふ。是を以て天地
の初とす。君臨は罔か。初罔知ら。皇祖の
御世とす。天下大同。都小彼此。かきものぞ。

天智天皇詔曰。万人を助々むと思ふもの。一人
は罰を。万人を殺さむとおもふもの。一人は
罪をゆるは。朕つね小万人の爲よ心を苦しめ。
よむ言葉の末までも。皆くるしみの万人を思

ふ外か。罔の父母として。何ぞ罔土は子を思
はざるべき。子をして父母は教ふあがふこと
あられ。

天武天皇詔曰。上下を齊牙和して。動ことれく静
小あらまむる小。禮と樂と二於並べてし。平
けく長く有るは。

元明天皇詔曰。天地の共。かかく遠く。常典を改免
じ。立とまふる。食罔は法を傾おとかく。動こ
を移く行をむと思は。云く。遠皇祖の御世を
始。天皇の御世と。天日嗣と高御座小坐て。

おの食圀は天下を撫給ひ慈給ふ事なり。辭立ち
あらば人の祖れ。己がこく子を養ひ治むる事
れ如く。治め給ひ慈み賜ひ來る業をあるも。神を
がら念わま。

元正天皇 五節舞を見 詔曰。今日行賜ふ態を見そ
かまはは直き跡とのみふいあらばして。天下
此人は君臣祖子の理を教給ひ。趣け給ふとふ
有るらしとかもれもなま。

聖武天皇 群臣 詔曰。君臣祖子の理を忘る事なく。
天皇の御世々々ふ。明く清き心を以多。祖の名

を載持て。天地と共に長く遠く仕奉れ云々。

又詔曰。高天原も天降り坐し。天皇の御世を始め
て。おの天官に御座よして。天地の八方を調
給ふ事は。聖君を坐せて賢臣供奉り。天下平け
く百官安くまて。天地の大ある瑞え顯れ來る
とかも。神あがらおもなま。

光仁天皇詔曰。天つ神圀つ神を祭るは。圀の大か
るみこばあゆ。も一誠もて敬ひ奉らば。何事
以多福を致さむ。

桓武天皇詔曰。天下を治め給ふ君なり。賢人の能き

臣等得てし。天下をば平ら々く安ら々く。治め給ふものふあるらしと。おも聞しめ候。云々。凡そ人の子に福を蒙らまくと。事ハ。親の爲ふ。や。おも聞しめ候。

嵯峨天皇詔曰。食圀の天下に政を。ひとり知づきも。れ。ふ。何ら。候。必も。後方シテの政あるべしと。古と。行ひ來ることぞ。皇后を定めてし。閩中の政ハ。成るも。れ。と。おも。常も。聞しめ候。民ハ。此ハ。臣習ひ奉りて。操行正しき。婦女を娶て。戸主とし。家事を治め。志むる事。古代より。れ。例。ふ。有ける。又詔曰。朕より。後の人主。示さ。れ。國土に。邪氣

のも。れ。を。罪。せ。む。と。り。万人の貧乏事を。は。う。ら。ひ。て。苦。し。み。を。救。ふ。惡。人。ハ。消。失。か。む。諸。の。人。れ。惡。き。ふ。る。ま。ひ。を。か。は。り。周。く。今。日。返。送。し。兼。ふ。は。よ。り。起。る。形。也。國。家。小。惡。人。也。て。源。か。く。と。ぞ。天。地。の。養。を。し。て。空。く。世。を。渡。る。に。あ。る。も。れ。か。也。愚。小。賤。き。もの。直。心。れ。な。き。は。お。と。り。め。か。也。直。う。る。は。き。人。主。の。直。う。ら。ぬ。故。か。る。べ。し。花。園。天。皇。詔。曰。朕。つ。ね。小。お。の。れ。を。責。て。臣。を。責。め。べ。故。小。天。理。能。志。め。ぬ。お。の。れ。を。思。ふ。心。を。以。て。近。臣。及。び。万。民。を。思。ふ。小。る。ぐ。ふ。事。か。し。君。と。依。

もれあどしき心小て。一生送らむ事こそ口惜
き事なり。人の鏡と依身れ。人のいよし免とあ
らむ事え。誠子あげうしき事なるぞし。後孫よ
く辨子知りて。天皇命れ道明らう小て。天地
を久しゝ依べし。

後小松天皇詔曰。夫天下れ主をては。民と共小
樂み。民と共小苦こ。神明の誠を身方とし。奇翫
を敵をよる時。困小悲みの民なく。困小遊客
れ諸侯あし。賤がうちにも心よよせて賢城も
ちひ。貴きがうちにも邪あるを捨依とき。天

地と久しう依ぞし。

後宇多天皇詔曰。夫世の人れ人か依ものゝあき
事や。常小人れ惡説をばとく語に傳ふ。善事ば
バ露し傳ふべ。朕つね小人れあやを傳ふば
心小留めざして。その人れ言と行の合を不合
をを見て。ちて後子口小出をのみ。あべて世中
れ人の惡き事多。人よろこび多。面を和して語
依事こそかかゝれ。

正親町天皇詔曰。昔れ人の末世の人れ爲し書を
著し。今の世の人れ身れ爲し書を隱し。愛はる

處をひとつふて。用るやとろの各別あり。

後陽成天皇詔曰。去のころ儒佛を學ぶもの多く
去て。神書を知るもの少し。物本末あり。事終始
あり。何ぞ本を捨多末をとらむ。神國をいいて
争う神書を疏せむや。萬機の政を本神事故
以て最第一とに。但し神代の事理をて小幽微
かり。理ふ非れむ通ぜじ。

永福門院宣く。世に悲しきもれあり。道ふ志深に
人れ貧しきと。愚ある者のとくら多きと。困れ
司る味もの。慈悲れあきと。名高き人の世小

もきて。賤しきと交をるやあり。これ悲しに
もの。至正あり。

敷政門院宣く。貴とかく賤とかく。女の何事ふめ。
物ふちしりして。心得あるさま志とるは
必む二心あるものをり。恥うした事ふこそ。か
べてむりしとめ女ははうあきもれふ多。男の
いろくいひ志ろふふ。百人の百人かぐら
も。とくる心いできて。長きうき名を流すもの
か。これおむきふ心をつけて。骨の粉小碎
た。とむは泥をか味とも。名はおもむ女

い。道を守るる事あり。人をもぐ好む方ふ。あ
やまにありといふことを知るべし。好まざる
方ふい。あやまにはあきものなり。

大塔宮良護親王奏言。浸潤の譖。膚受れ愬。事小禍と
起りて。みか大ふ及ぶ。乾臨何ぞ古をひきて
今を鑿とばる。

寶訓文彙附録

大伴氏祖神言立。海行りて水づく屍。山行りて艸
むさうむね。大王の邊ふこそ死あめ。のどふい
死あじ。

秋山フキヤ之下シタ氷ヒ壯夫ラトコの母教曰。我御世の事能こそ神
習ふ。又うつしき青人草習えむや。

物部大連尾輿公。中臣連鎌子卿奏曰。我国家を恒
小天つ社罔つ社の。百八十神に祭字以て事と
に。改て蕃神胡鬼佛を拜せば。恐らくは罔神天神
地祇云ふを此怒を致さむ。

又曰。何ぞ罔神胡鬼ふ背き奉りて。他神ありを敬せむ
や。もとよみ斯の如き事字知らば。

捕鳥部ト萬主ベ絶命の語。萬々天皇の御楯ヲをありて。
勇を効オモえさむカ欲カひしもの故。

蘇我倉山田石川磨公絶命語。死てめあお忠字に
もはむ。

忌部廣成宿禰曰。祖を尊び宗を敬ふは。禮教に先
ふまゝカをカころあり。

天満宮宜く。我世ふあカり時常に願へるは。後カ
我如く慮の外に禍ふ遇む人。まべて心誠に小行

ひ正し人に侘悲むをば助々救む。人を沈め
損ぜむ者をバ糺カき身とあらむと願ひに。思
ひの如くありとあり。

藤原鎌足公曰。吾惟一の神道ハ。天地を以て書籍
せし。日月を以て證明とス。是をカはち純一無
雜の密意あり。故に儒釋道の三教に教を要と
用ふカるカるカるもカなり。然れども唯一に潤
色として神道の光華とス。廣く三教のカ學カ成
存し。専ら吾道の淵源を窮免むもカハ。まと何
の妨カりあらむ。

藤原武智磨公曰。あべての人があつてもくたくしくくるはしき事を談るべからば。その心ふかりと云ことおし。心ふ偽り一多むあれば。必ぞ時あつて外ふ出るあり。おれ天の心は内外に行くとめあるが故あり。此事を知らむもの争うふどれは心あらむ。

藤原、小黑磨卿曰。人として一言も悪を語るべからば。物を損し人を失ふこと甚し。大人を天下小及び。小人の里郷よ及ぶもれあり。如是ものは。必ば天地の神ふくみて亡きものなり。恐る

るし。

藤原、永手公曰。善心を好みて常あつるもれい。そのよめる事を樂む。悪心を好みて常あつるもれい。その悪める事を樂む。それ樂む所を一かち。その善事と悪き事は。あつちと隔れり。かち。その善事と悪き事は。あつちと隔れり。和氣、清磨卿曰。諸の罪科を改むるより消え失せぬ。諸の善は修しぬるより次第小まして。後ふを国家ふみつるもれあり。

小野篁卿曰。世ふ人のうらむる心は。それ志しきよあつてあり。志しうらむるふり。恨心

かこ。はれば道をわもふよめ。善惡の言葉あり。人の毀譽は有るものあり。

藤原家良公曰。人貧しを時を必ぞ信ありて。富榮えぬればたごとて偽多し。これ富てはよろづ心のまゝあるべきふ。偽いとむとふはあらぬぞ。貧窮の時を人こふあやめられど。心をらば道を守は事おかし。富てよろづ人子用いふるを事おかし。心あらば道の心おくなと行て。おどれるふりのみ多し。貴となく賤となく。常ふ心を入る知るべきは專一あり。

藤原經忠公曰。人の急難を救ひ。貧窮れものたふをけ。まこれとるをたこし。やぶれふしをせよ。あつはものは。必ば天これを佑て。その名四海にあふま。子孫も永くとして榮えぬること。是天下に常あり。今の世かくの如き人ありといふども。皆身の爲ふして。天地の心子あらねば。その名隣家も知らば。

藤原公任卿曰。人間第一の後悔といふは。始を何つくせば。終をわくし。まばるをり。是よと諸の事おこり侍るもたあり。

藤原通憲朝臣曰。人苦これ中ふ苦を樂しめば。くるしみあし。貧苦を樂めば貧苦あし。天地の間は物と志て樂まばといふことあし。

菅原高能卿曰。ひととみ山に住む人ぬ。見ぬ世の人を友として。あうしくらをもれえ。雨風のはげなきふも。心とろこばし。うらぬ日ひ好し。唯むあし。た人こそ。はびなきあど。いふ光る事あり。

菅原茂長卿曰。皆人ふとふし人のもて何そびぬる珍奇欲求多。見ぬ世は人のうとみとしてと

いふ。かくいふも。ある事あれど。むうし今見ぬ人れか。とみふは。一筆の跡のみぞ。まよなきあきあみ。とぞそれ人れ面うげある。殊にあつうしきい。なれふし筆れ跡見あびふ。身志ある雨の袖にふとらう。家事。誰もかく有ふとふや。

藤原政忠公曰。人を一生のうち。おのれは是かに此道よくあまづきせおもひとりて。万事はやめて一事をおこらう。ばあまらむ。必しも天下の寶とあるべし。む好しく光陰をおくれるは。宗廟のいうり給ふ道あり。好くし。みおもひ

をるべきは第一なり。

藤原雅親卿曰。師木嶋の道を行入る。其心をあま
ふし。白き衣。小墨繪の村千鳥つけて。紅れうら
を流け。帯をくろり。衣をべし。劔を腰に横とへ。志
をやのふあゆと出。おもひよ。衣をべし。そのうと
に。あま一筋ようちいで。思ひしことかあつ
む。やぐてかへる。衣をべし。よろづ心ふりけて。かけ
べしてくごく。志を事。見聞く。誇うら。大空
の月。はちや々。心地して。ぞ。阿らむ。

藤原公行公曰。人う。正にも悪人と知て。は。ど。は。正

物いふ。ふ。る。ら。ば。物自然とそむる事。これ天地
の常あり。善人め。ま。ま。ま。か。く。は。如。し。古人の
いひし。花中の鶯を。そ。は。聲は。あ。ま。ま。ま。加。む
ば。し。と。い。ふ。る。事。も。こ。は。謂。ふ。や。

藤原隆繼卿曰。人。を。志。て。幸。不。幸。は。天。と。正。め。與。へ
ど。地。と。め。も。與。ふ。は。幸。不。幸。は。そ。は。つ。と。む。る
所。よ。正。ある。不。幸。を。流。い。そ。は。終。を。め。ば。る。よ。り
れ。こ。は。愚。ある。も。は。い。は。と。め。行。な。く。と。む。ふ。外
ふ。向。て。求。る。の。み。

平重盛公曰。む。ろ。忠。臣。を。あ。ま。ま。死。ま。と。も。逆。臣

とあてて生きざ。又云く。徳を以て人小勝もれは昌^{サカ}え。カ坂以て人小勝つもの亡ぶ。

藤原、藤房卿曰。賞それ功小中^{アタ}れば。忠あはもの進み。罰その罪小當まむ。咎あるもの退く。又云く。天の災字見^ミまひ。いまど棄^シばるれゆ。災小逢て改めざれば。天永くおれを棄つ。故ふいまど天の時。人の和あゆて興らばるものあらば。天棄人畔て亡びざるもれあらば。

藤原、兼良公曰。人惡を顯明の地小あせむ。帝王これ誅し給ひ。人惡を幽冥の中小あせむ。鬼神

おれを罰し給ふ。善まあし福字得るも。亦おれ小同じ。

良忠

殿、法印

曰。無道ま誅せむ爲小隱謀を企ること

更小疎忽れ義小あらば。云く。普天の下王土小非ざと云ふとあく。率土の濱王民小非ざと云事あし。

藤原、師賢卿曰。主憂ふれば則臣辱免られ。主辱めらるれど則ち臣死まといふ。縦^{タト}ひ骨を醜^{シメ}小せられ。身を車裂小せらふとめ。傷^{イタ}むべき道小あらば。

藤原資朝卿

北條賊が爲小斬られ給ふる時其曰。子阿部殿ふとて書残されし文ふ

和翁屈平の楚思多懷き。八回優游以て今日小至る。汝が爲よ言を爲ひ。秋霜三尺曾て貞松を埋めび。士も之見て眼睛を豁開を洒と落とひとめ乾坤は間小立つ。

源親房卿曰。御国を天祖經始の地。日大御神統領の州あり。聖く相承。授受るがはむ。云と。ふれ小依て上神代の古も。下人皇は今小及む。国家を傾々むと欲まはもれむ。必は種類多絶つ。世は知るところ。誰う敢て去れば疑む。

橘正成卿曰。義は爲小身を顧みづるは。忠臣勇士の所存あり。

橘正行朝臣

其第正之朝臣と。四條の曙ふて。

絶命語。古小云く。臣

せしてハ忠小死し。子としてハ孝よ死せと。我兩人の謂なり。相與小自殺ひ。

源義貞朝臣曰。叛を討ち亂を撥ひ。義貞あらざれど不可なり。自ら名を義貞といふ。弟小次郎小謂て曰く。吾義を擧げむ。則ち義宜く助をかせ。迺ち之を名々て義助といふ。

橘正季朝臣絶命語。七生までめ同じ人間小生れ

て。朝敵を亡さむと思ふ。正成卿

橘正勝朝臣曰。

賊將源義満降を勧めける。吾不肖おれども。祖父正成の遺訓

を守りて。世々忠義を盡せり。いッて不義は富貴を貪るる死。

平信長公曰。我一日片時も枕を泰山の安き小お

うべ。一命は輕じ粉骨を盡し。私欲を去り士は

勞小代り。偏小四海の逆浪を治め。王道の衰

多依を興し。風は移し俗を易す。再び政教を無

窮小垂れむと欲するもれあり。

豊臣秀吉公曰。日本は神國なり。神をかはち天帝。

天帝即ち神あり。全く差タカひ移し。おれ小依て國

俗風度。王法を崇め。天小體し地。則也。言あり

令あり。然れといへども。風移り俗易して。朝命

を輕じ。英雄權を爭ひ。隣國分崩す。予云く。壯年

に及び。夙夜世を憂ひ。國を愁ひ。聖明を神代小

復し。威命は萬代小遺さむと。おれを思ふて止

まじ。

輝子曰。

藤原利仁卿室。

男子は女小遠ざくる心あらば。此

人よりあらば。道を得ること。此近きを。知

るべし。

相摸曰。

或說小相摸守大江公資女。或云妻。

吾身小よき人を。とくお

もひ。うとた人をうせく思ふ。却絲の事をり此
外小心を入て。ときまへ知る。むた事あり。後人
みゆづるあり。

赤染衛門曰。赤染時用女。実心ははとあきものは。

心をうごかして身も安んじ。上智れ人も。心も
安んじて身を安んぜじ。あべてれ人の安んじ
むたを苦しめ。くるあむべき故安んじるが故
小。一生心のゆくあり。

民部卿局曰。藤原定家卿女。かみつうとは。うあらじ無理
宣ふものと忘れは恨みあり。あもつうとい。必

じおろうあはれものと知れぬ。吾小いうにあり。
小督局曰。高倉宮女房。あやあき事を語るは。うあらじ
それ心の正しうらぬ人のいふ事あり。あは常
ならむぞ。よろづ違ふ事あり。

明子曰。藤原伊長卿女。心小徳あり。よるづ心はあは
る事を。人あむて。それ徳をあむ事を。知れ人
あし。故小智慧才覺のみよこりて。一旦あま
事あり。天の心から糸は。夏雪れ如し。

經子曰。藤原尹房公室。一座の興ふも。いねをわがあしき
はあし。一言もあむはあき事を。一言いつ

をゆをい牙ば。方言これ偽也やあるもれなり。
ものまづ心ずううみ出て。口ふをいふもれか
れぞ。ほこせの人ふ。あをぶれれ謂何らむや。は
づりた事ふこそ。

清少納言曰。

清原元輔女

人ふああづるゝもの。あま

心よーと人ふあられとる人○心あそく
志き女。

又曰。ふくきもれ。いそぐ事あるをゆふ。長ぶとま
る客人○火桶まびつあどに。手れ裏うちあへ
し。皺うちのべあどーて。あぶゆをるもれ○酒

のこてあうき口を探也。髭何るもれ。それを
あで。盃人ふとらきるかどのけーき。いみじ
くふくーを見也○物うらやみし。身の上あだ
き。人の上いひ。おゆぞの事もゆうし。が也。
聞まやーが也て。いひあらぬをが怨ミど譏ミめ。ま
る僅子聞也と事なば。吾もとよ也知りとる
事のやうふ。他人トふも語也あらへいふも。いと
ふくし○物きうむと思ふやどよ。あく子○遣
戸あどあらく明るも。いとふくし○物語あど
きるに。ちー出て我ひせりちいやぐるもれ。は

登てはし出た。童も大人もいとふくし。昔物語
あどまはる。我志^{マシ}に^{マシ}りたるは。ふと出ていひ
くるしあどまる。いとふくし。○あうらはまふ
來とる。子ども^コも^モは^ハべを^ベ勞^{ロウ}と^トグ^グて^テ。お^オう^ウし
死物あどま^マる^ルふ^フから^ラひ^ヒて。恒^{コト}に^ニ來^キて^テ居^ル入^リ
て。あ^アと^トめ^メふ^フ引^ヒち^チら^ラし^シる^ル物^{モノ}よ。手^テふ^フれ^レそ^ソ
き^キ居^ルと^トる^ルふ^フく^クし。○文^{モン}詞^ジあ^アめ^メき^キ人^ニと^トそ^ソい^イと^ト
ふ^フく^ク々^々れ。世^セ々^々あ^アの^ノめ^メふ^フ書^{ショ}流^{リウ}し^シる^ル詞^ジは^ハふ^フく
は^ハと^トそ^ソ。は^ハる^ルお^オじ^ジき^キ人^ニの^ノ許^ヨり^リ餘^アり^リ畏^{カシ}め^メと^トは^ハも。
げ^ゲふ^フと^トろ^ロき^キ事^ジぞ。は^ハき^キと^ト吾^ガ得^トら^ラむ^ムハ^ハ理^リゆ。

人の許あるさへふく、こそあれ。大うとはこ
むうひても。あめきいあどあくいふらむせ。う
とはらいと。ましてを人あどを。は申しも
れ。はるいをこふていとふくし。○をとこ。從^従
者^者あど。お^オま^マる^ル。は^ハと^トま^マふ^フあ^アど^ドい^イひ^ヒと^トる。い^イせ
ふ^フく^クし。

又曰。おげあたもれ。あまき手を赤き紙よ書とは。
又曰。ととへあきもの。同じ人あぐるも。心ばし
失ぬるは。まことお非ぬ人とぞおがゆるうし。

又曰。何アグとたもの。舅ヤクふやめらるゝ。聒カク○ま
姑コウふ思はるゝ。よめぎみ○主そゝらぬ。人の從ズ
者○於カもれくせうとはふくて。かち心ばま
めまぐれて。世ふ在カやど。聊カのきざおた人○同
じ所ふ住む人の。互カに恥カうはし。聊カの隙カなく用
意志とめと思ふが。終ふ見えぬこそかち々れ。
○物語集おど寫カに本ふ墨つ々ぬ事○よき双
紙おどは。甚イづく心志てかけどめ。必カこそま
かげふなほめれ○男も女も法師も。契カは深く
てかふるふ人の。末まで中とた事とし○於

るひよた從ズ者。

又曰。かふるらいとたもれ。客マ人おどに阿カむて物
いふふ。奥の方カうちとけ言。人のいふを制せ
て聞く心ち○思ふ人れ酔て同じこや志と家
○聞居とるをもあうで。人のうへいひと家。そ
れい何むう正カあらぬ於カひ人をれど。うとは
らいとし○旅どちある所。近き所おどにて。げ
きどもればきうはしある○ふくげな家カ兒カ坂。
己が心ちふ愛カとおひふあうふ。うつくしみ遊カ
ばし。おれが聲カれまぬふて。いひ々家カ事おど語

正ある○才ある人の前ふて。才ある人の物覺
えが本小。人此名あどいひある○こせふよし
ともおぼえぬ我歌。人小語正きりせて。人此
かめし事あどいふめ。うとはらいとし○人の
起て物語あどまる傍子。あさはあううちとけ
て寢ネとる人○まど音ネも弾ヒきとくの一ぬ琴。故。
心ひとつやめて。はやうれうと知正つる人此
前ふてひく。

又曰。あさあしれたもの。人此爲子。はづりきこと。
つ、みもれく兒チゴも大人オトナもいひと家○むぐふ

知らば見ばきりぬ事。人のちむかひて。あ
らぐはきべくもあく。いひと家○もれうちこ
がしあるめ。あはまじ。

又曰。あえれあるもの。孝ある人の子。

又曰。むとくあるもの。えせもの、從者ズサかむぐふ
家○おきれのもの。せぐ正えあちたる○人此妻
あど此。もの怨ウレど志て隠き家。か形らむ尋
糸さこぐむもれをと思むとるに。ちしも思ひ
あらば。ねとげふもてれしとる。ちてもえ旅タビ
どちめとらねむ。心といで來る家。

又曰。はしとあはれもれ。こぞ人を呼ぶ小。我うとて
はし出あるもれ。まして物やらにをゆい。いと
どおのづうう人のうへなど。うちいひそし
おども志と縁多。幼き人れきくやりて。其人の
阿る前ふいひ出る縁。○哀ある事かど。人のい
ひてうちあくふ。げよいとあをれとは聞か
ら。泪のふつといで來ぬ。いとはしとれし。あま
おおれくゆ。けしきことにあせど。いとあひあ
し。めでとた事を聞くふい。とぐ出き小こそ出
くれ。

又曰。と己所なきもれ。かたちふくげよ。心あしき
人。

又曰。人ぞえをるもれ。おとなる事をた人の子れ。
あれしと志あらをれと縁。○咳シカキはづうしき人
小物いはむとせむ小も。まづ先どつ。○あか
これとふせむ人れ子どもれ。四つ五つなるは。
阿や小くどちて。物かど取ちらして損ふ多。ほ
縁い引はられかど制せられて。心の儘ふめえ
あらぬが。親れ來ある所えて。もうしが己々る
物多。あま見せよや。母かど引ゆるがを小。おと

あれど物いふとて。ふやも聞いれねば。手は
ら引さがし出て見ること。いと小く々れ。それ
はまはかとばうりうちいひて。やまうくさで。
はかせそ。せとあふまとばうり。あみていふ親
め小くし。われえはしとかくもいそで。見るあ
そくくろもとあ々れ。

又曰。おろきもれい。詞の文字あしく遣ひる家こ
そあれ。とどもど一類よ。あやしくも。あてにめ。
いやしくもあるは。いりあるふり。あらむ。はる
はかう思ふ人。よろづれ事よ。まぐれても。えあ

らごのし。いづき。あよきありたとは。あはふり
あらむ。はまとめ人を知らず。とどはうちあか
ゆるもいふめり。難義は事。あひひて。其事は
せむとほといえむといふ。あともどを失む。
あといえんぎる。里へ出んぎるあといは。や
がていとさろし。まして文をうきてい。いふべ
きふもあらげ。物語こそあまうりきあどまき
だ。いひのひかく。あくと人さへいとあう々れ。
あかに定本れあ。あど書付とる。いと口をし。
ひてつくあまふあどいふ人めあれた。もとむ

といふ事を。見むとみれいふめり○いとあや
まじ事を。男かどは。こぼとつくろいで。ふとら
らふいふいゝ。いゝうゝ。我詞ふもて。ほけてい
ふが。心おとりきる事あり。

又曰。見ならひきほもれ。あくび○兒ども○あま
けいうらぬえせもれ。

又曰。うちとくまじれもの。悪と人ふいはるゝ人。
はるは善ヨシを忘られとるよめを。うらなくぞ見
ゆる。

又曰。見ぐるゝれもれ。きぬの脊せぬひ片よせて暮き

とる人。まとの々くびとと人○例あらぬ人
れ前ふ。子をぬていきある○袴着とる日らひ
のあしどをはきある。それはいまやうれもの
なり○却ちうぞく忘と人ものゝ。いそぎと
あもみと人。

官許

明治六年七月

辻鼻家藏版

製本所

京都

菅廼舎池邨氏



189
24

